

日本語ドラマ作りとラテンアメリカ演劇

河内千春

2002・03年度の「口頭表現8」（上級）など、日本語クラスで何度かドラマ作りを行ってきた（IAPL第1回大会で発表）。2008秋からは「テーマ科目：日本語でドラマを作る2-4」として、初級後半から中級の学生を対象にドラマ作りを行なっている。

クラスの進め方は、1週目にオリエンテーション、2～4週目にゲームなどのウォーミングアップの後、留学生2～3人と日本人ボランティア1～2人グループに分かれ、5～8週目に台本作り、9～13週目に上演のための稽古、14週目に舞台（教室内）で発表、15週目にフィードバックを行なうというものである。

テーマは、人間関係いろいろ。テレビドラマ、アニメ、日本昔話、童話などを参考にしてもよい。社会的なメッセージ（環境・貧困・・・）を伝えることは特に考えていない。

08秋～09秋の3回の結果をまとめると、「毎時間欠席者があり稽古が進まない。本番までに合わせられない。」というグループもあったが、「未習語のセリフを覚えることで、日本語能力を高めることができた」という学生が多かった。また、社会的メッセージを考えずに作っていたが、フィードバック時に発見することもあった。

2008年秋に「コロンビア演劇ワークショップ」に参加して、ラ・カンデラリアという劇団のサンティアゴ・ガルシアというコロンビア人演出家の演劇理論を学び、体験した。「集団創作」という方法と私のクラスの進め方に共通性があることを発見した。

現在はアウグスト・ボアールというブラジル演劇人の理論を学んでいる。「フォーラム・シアター」という方法は、初めにテーマ（例：貧困問題）を明確にして演劇を作り、上演し、その後、内容に関して観客とともに討論をし、問題解決法を探るという演劇である。

ガルシアやボアールなどのラテンアメリカ演劇の特徴は、社会と関わっているという点である。社会的メッセージを明確にして作ること、フィードバックを充実させるという点は、今後の参考にしたいと思う。